２０２４／１２／２２　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：最高の愛の贈り物
聖書箇所：ヨハネの福音書　３章１６節

この朝、はじめての方も、久しぶりの方も、またいつもの皆さんも含めて、主イエス・キリストの誕生をお祝いする礼拝の時を持てていることを、心から感謝しています。これから私たちは神様のことばである聖書から、“最高の愛の贈り物”について一緒に考えてみたいと思うのですが、その前にまず一つ質問があります。ちょっと考えてみてください。

皆さんはこれまでにもらったクリスマスプレゼントの中で、いつまでも記憶に残っている一番嬉しかったものは何かあるでしょうか？今週メッセージのためにいろんな調べ物をしている中で、偶然“子どもの頃にもらって嬉しかったプレゼントランキング”というものをネットで見つけました。当時人気だったプレゼントが年代別にいくらか挙げられていました。懐かしいかもしれません。例えばこんなものがありました。１９９０年代に生まれた子どもがもらって嬉しかったものには、ポケモンなどのゲームソフトや６４などのゲーム機が挙げられていました。１９８０年代に生まれた子どもがもらって嬉しかったものには、ファミコンなどのゲーム機、リカちゃん人形やセーラームーンのおもちゃなどが挙げられていました。１９７０年代に生まれた子どもがもらって嬉しかったものには、同じくファミコンなどのゲーム機に加えて、超合金やバービー人形、勉強机などが挙げられていました。１９６０年代に生まれた子どもがもらってうれしかったものには、サンダーバードのプラモデルや、ウルトラ怪獣大図鑑、洋服などが挙げられていました。最後のは、私には何を言っているのかわかりませんけれども…。そしてこれ以上の年代は残念ながら載っていませんでした。なので、これ以上の年代の方は、またあとで私に何が良かったのか教えてください。こうしてこれまでのものを振り返ってみると、それぞれの時代を色彩るさまざまなプレゼントがありました。いろいろなものが流行っては人気になって、そして時代が変わるとまた別のものがそれに取って代わり、そうやって今では多くのものが、懐かしい過去のものになっていたのです。もらった当時の嬉しい思いは、私たちのうちに変わらず残っているかもしれません。でも、そのもの自体は変化して、次第に失われていっています。あらゆるものが時代の流れとともに徐々に徐々に移り変わっていくのです。

でも皆さん、そんな中にあって、“いつまでも変わることのない最高のプレゼント”というものがありました。昔も今もどんな時代であろうとも決して色褪せることのない、すべての人に喜びをもたらすそんな“最高の愛の贈り物”がありました。いったい何でしょう？それこそ、救い主としてお生まれになったイエス・キリストでした。そしてきょう私たちが特に見ていくヨハネ３：１６では、そんな贈り物に関して、大切な大切な真理を私たちに教えてくれているのです。もう少し詳しく言えば、大きく分けて四つのことを見ていきます。一つ目に「 贈り物の贈り主」について、二つ目に「贈り物の贈り先」について、三つ目に「贈り物の中身」について、そして四つ目に「贈り物の目的」についてです。それぞれ順に考えてみましょう。そして皆さん、ぜひこのクリスマス、与えられた最高の贈り物について、聖書が何を言わんとしているのかということを、一緒によく考えてみましょう。今回初めてみことばを見るという方がおられるなら、どうかこの時間よく神様の教えに耳を傾けてみてください。今もしかしたら、興味はない、自分には関係ない話だと思っている人もいるかもしれません。そんなあなたにも欠かすことのできない、あなたにとっての永遠に関わるその事実が、きょうの箇所には語られています。 ですから、ぜひ自分自身のこととしてよく考えてみてください。

またここまでヨハネの福音書を順番に学んできている皆さん、覚えていますか？私たちは特にここ２週間にわたって、イエス様とニコデモとの間になされた会話から、私たちの救いにとってとても大切な

内容を学んできました。人はどんなに宗教に熱心であろうと、どんなに知識を蓄えていようと、どんなに道徳的に正しかろうと、神の国にははいることはできませんでした。永遠のいのちに至ることはできませんでした。人はただ人の子を見上げ、十字架につけられた人の子を信じる信仰によって救われるのだということを、改めて学んだのです。ひとりひとりにとっては、これは真新しい教えではなかったと思います。それでも、すべての人にとって欠かすことのできない真理でした。

これから私たちは、ヨハネ３章１６節を見ます。この箇所は、ある意味多くの人たちにとってよく知られている箇所の一つと言っても過言ではないでしょう。でも皆さん、この箇所は、救いにおいて全くの無力な罪人に対する神様の愛というものを見て取ることができます。神様がどれほど愛に富んだお方なのかということを、この箇所は私たちにはっきりと示してくれます。ですから、ぜひこのクリスマスの時、いったい神様がどのようなお方なのか、私たちに与えられた救い主がどんな存在だったのかを改めてよく考えてみましょう。この礼拝のクリスマスのこの時が、皆さんにとって、神様に対する、救い主に対する愛を増し加える時となることを、心から願っています。では一度みことばをお読みします。

ヨハネ３：１６

「 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

〇与えられた愛の贈り物：

１．贈り主：神様

では、一つ目の内容から考えてみましょう。いったいだれが最高の贈り物を与えてくださったのか？その答えは、「神様」でした。みことばを見てください。１６節はこんなことばで始まっています。**「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」**と。はっきりと書かれていました。贈り主は、「神様」でした。この世が、神様を愛したのではありません。この世が、贈り物をください、くださいと熱心に求めたのでもありません。神様が、世を愛されました。神様ご自身が、その大きな愛のゆえに、贈り物を贈ってくださった、というわけです。別の箇所も同じ真理を述べていました。Ⅰヨハネ４：１０にこう書いています。**「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」**ある意味聞きなれたことのように感じるかもしれません。でもこれは、あまりにも凄い事実でした。神様は愛のお方でした。そして、そんなお方が、私たちのことを愛してくださっているというのです。

立ち止まって改めて考えてみてください。神様のことばであるこの聖書は、繰り返し繰り返し神様のすばらしさを、神様が比較できないほど偉大なお方なのだということを語り続けてきました。詩篇８６：８**「主よ。神々のうちで、あなたに並ぶ者はなく、あなたのみわざに比ぶべきものはありません」**出エジプト１５：１１**「【主】よ。神々のうち、だれかあなたのような方があるでしょうか。だれがあなたのように、聖であって力強く、たたえられつつ恐れられ、奇しいわざを行うことができましょうか。」**またイザヤ４５：１８**「天を創造した方、すなわち神、地を形造り、これを仕上げた方、すなわちこれを堅く立てた方、これを茫漠としたものに創造せず、人の住みかにこれを形造った方、まことに、この【主】がこう仰せられる。「わたしが【主】である。ほかにはいない。」**と。神様は偉大なお方でした。神様はみことばが言っているように、確かにこの世界のすべてを造られた創造主でもありました。この世のものはどれも偶然できたわけではありません。私やあなたもたまたま生まれたのでもありません。私たちはみな創造主なる神様によって造られた作品でした。この方は創造主であるだけではありません。この方は確かに聖なるお方でもありました。この方はどんな汚れをも忌み嫌い、罪を正しくさばかれる義なる審判者でした。今も変わらずにすべてをご覧になっておられ、今も変わらずにすべてを知っておられ、今も変わらずにすべてを支配なさる、そんな力を持った主権者でした。文字どおりこの方に並ぶ者はほかにいませんでした。これほどまでに圧倒的な力、知恵に満ちた神様には、すべてをご自分の意のままにする権利があったのです。

でも、その神様は同時に愛のお方でした。そしてそんな神様が私たちにも愛を示してくださったというわけです。どうでしょう？この事実は、私たちの心に、今真っ先に驚きや感激や感謝をもたらすでしょうか？確かに何度も何度も聞いてきたことかもしれません。でもこの事実は、私たちにとって喜びをもたらすでしょうか？それとも、もう当たり前のごく自然なもののように感じてはいないでしょうか？

覚えていますか？ダビデという人物は以前こんなことばを残しました。詩篇８：３－４こう書かれています。「**:3 あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、:4 人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。**」ダビデは、見上げた夜空の広大さと自分自身を比べたときに、いかに自分が小さく無力な存在であるのかということに気づかされていました。すべてを造られたその神様の前に、いかに自分が取るに足らない存在なのかを覚えていました。しかしその中でなお、か弱い小さな自分のことさえ忘れずに心を留めていてくださる、その大きな神様に感謝をしていたのです。忘れてはいけないこと、それは、世界の造り主である聖く正しい神様が愛を示してくださったというのは、何も当然のことではありません。すべての主であり、すべての王であられるその創造主が、被造物のために贈り物を与えてくださったというこの事実は、何も当たり前のことではありません。神様の測り知れないあわれみでしかなかったのです。いったいだれが最高の贈り物を与えてくださったのか？その贈り主は、愛そのものである神様でした。神様の愛がすべてのはじまりだったのです。

２．送り先：世

では、そのような神様がいったいだれに贈り物を贈ったのでしょう？その贈り先についても、みことばは教えてくれていました。もう一度３：１６をよく見ると、このように書かれています。「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。**」最高の贈り物は、どこに送られたでしょう？神様の愛は、だれに対して示されたでしょう？その贈り先は、「**世**」でした。神様は実に、「**世**」を愛されたのです。そして、これも信じられないことでした。なぜか？「**世**」は、神様の愛を受けるのに値するような良いものでも、すぐれた者でもいっさいなかったからでした。

▶**「世」**

ここに登場してきた「**世**」ということば。確かにこれにはいろんな議論がなされます。でもこれは、新約聖書を通していろんな意味で使われているのです。例えば今私たちが住んでいるこの“地球”を指して「世」と言われることがあります。でも興味深いのは、今私たちが見ているこの福音書の著者ヨハネは、このことばをその意味では使わずに、主に別の意味で用いていました。どんな意味でヨハネは「世」を用いていたのか？いくつか実際の箇所を見てみると、少し戻って１：１０にこのように書いていました。「**この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。**」と。「**世**」とはいったい何でしょう？「**世**」は神様イエス・キリストによって造られたにもかかわらず、この方を知りませんでした。造り主に関心を払おうとせず、造り主として認めようともしない、そんな主を拒む者たち、それこそが「**世**」でした。今度はヨハネ７：７を見ていただくとこう書いています。「**世はあなたがたを憎むことはできません。しかしわたしを憎んでいます。わたしが、世について、その行いが悪いことをあかしするからです。**」「**世**」とは何でしょう？「**世**」はキリストを心から憎んでいました。光である方を拒み、暗闇を愛し、悪を喜んで行う者たち、それこそが「**世**」でした。そしてもう１か所だけ、１４：１７を見ると、こう書いていました。「**その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。…**」「**世**」とは真理である方をかたくなに拒んでいました。真理に反抗し、それを見ようとも、知ろうともしない、そんな堕落した者たち、それこそが「**世**」だったのです。

そうすると、まとめて考えると何が言えるでしょう？神様が愛された「**世**」。これは、愛するのが容易な何の問題も抱えていないものではありませんでした。「**世**」は神様やキリストを心から憎み、悪を

愛し、かたくなに逆らい続けて歩む、そんな堕落した人たちのことだったのです。神様の愛に値するような部分は一つとしてありませんでした。しかし、そんな者に対して神様がご自身の愛を示されたのだというわけです。 かつてチャールズ・スポルジョンというひとりの牧師もこんなふうに言いました。「神がこの世を愛する理由となるものが何かあったのでしょうか。そこには愛すべきものは何もありませんでした。荒れ果てた砂漠には、香りの良い花は咲いていませんでした。神に対する敵意、真理への憎しみ、律法の無視、神の命令に対する反抗…それらが荒れ地を覆う茨と棘でした。そこには望ましいものなど何一つ咲き誇っていなかったのです。にも関わらず、『神はこの世を愛された』のです。」驚くべき神様の姿が描かれていました。ちょっと自分自身のこととして考えてみてください。私たちならどうでしょう？ もし私たちが、だれかが自分のことを嫌っているとわかったなら、だれかが自分のことを傷つけて、だれかが自分のことを無視するなら、そのような相手にどんな態度を示すでしょう？だれかが自分の思いや考えを常に踏みにじり、いつも自分に歯向かうような態度や行動を取り続けてくるなら、そのような相手にどう対応するでしょう？もしかしたらそんな相手を同じように無視するかもしれません。関わりをいっさい持ちたくないと距離を取るかもしれませんし、その相手に対して苦い思いや憤りを抱くかもしれません。固く心を閉ざしてしまって冷たい態度をとって、「こんな態度を自分がとるのは相手が悪いんです。先にひどいことをしたその相手の自業自得なんです。」と自分自身に言い聞かせているかもしれません。私たちの愛は相手や状況によって容易に左右されるものであるのです。でも神様の愛は、根本的に違っていました。神様が私たちを愛してくださったのは、私たちのうちにその愛に値する何かがあったからではありません。神様の目に留まる何かすばらしいもの、何か良いものが私たちのうちにあったからでもありません。私たちのうちには何もありませんでした。むしろ私たちはみな、生まれながらに造り主に関心を払おうともせず、感謝もせず、神様をかたくなに拒み、逆らい続けていた罪人でした。神様を知ろうともせず、愛そうともしない、自分の欲に従って生きていた、そんな罪に堕落した存在だったのです。だからこそ、確かに罪を忌み嫌っておられるその聖い神様の前に、すべての者が滅ぼされてしかるべきでした。神様に逆らって敵として生きていたそんな私たちはみな、自分自身の罪深さのゆえに神様の御怒りを、永遠のさばきのみが値したのです。それが、ごく自然のことでした。しかし、そんな者を神様があわれんで、愛を示してくださいました。神様の愛を受けるのに何の価値も見出すことのできない、愛するのがあまりにも困難な罪人のために、神様は最高の贈り物をみずから与えてくださったというわけです。神様の愛はほかの何かに左右されるものではありませんでした。神様の愛は、ただご自身の性質に基づくものだったのです。

そして、この愛は皆さん、この愛はあまりにも偉大なものでした。あまりにも深くて、あまりにも測り知れないものでした。だって考えてみてください。罪を憎む、罪を忌み嫌っておられるその聖なる神様を私たちが正しく覚えると、すべての人を一瞬にして滅ぼさず、ご自身の愛を示してくださるというのは、ありえないことでした。でも神様はそのような愛を示してくださったのだというわけです。

３．贈り物の中身：ひとり子イエス・キリスト

そして凄いのは、これで終わりではありませんでした。この方が実際に示してくださったその愛は、贈ってくださった贈り物によって最も表されていました。どういうことか？次に、どんな贈り物を与えてくださったのか、その中身についてもみことばは教えてくれていました。 １６節をよく見てください。このように書いています。「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。**」神様がその愛によって与えてくださった最高の贈り物。その中身は、「**ひとり子**」でした。「**ひとり子**」であるイエス・キリストを、父なる神様はこの世に遣わしてくださったのだというわけです。

ここで特に注目してほしいのが、この「**ひとり子**」ということばです。「**ひとり子**」と聞くと、どんなイメージを思い浮かべるでしょう？普段ならさっと読み飛ばしてしまうようなところかもしれません。でもこの「**ひとり子**」ということばには、その子がだれかにとって何よりも特別な存在である、という

ことを強調する意味合いが含まれていました。だからこそ聖書の中を見ると、ある父親にとって、ある母親にとって大切な存在としてこのことばが使われることがあるのです。例えばルカ７：１２で、ナインという町にいたひとりのやもめの母親にとってのひとり息子を表すのに使われていました。**「やもめとなった母親のひとり息子」**と。またルカ８：４２で、会堂管理者だったヤイロにとってのひとり娘に対しても使われていました。**「十二歳ぐらいのひとり娘」**と。そしてもう一つ挙げるとすれば、かつていけにえとしてささげられそうだったアブラハムの息子イサクに対しても使われていました。ヘブル１１：１７にこんなふうに書いています。「**信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。**」これを読んで考えてみると、よくわかりません？これらの箇所は、父親、母親にとって「ひとり子」というのがどれだけ大切な存在なのか、どれだけ大事な存在なのかということを明らかにしていました。「ひとり子」というのは、親にとってかけがえのない存在だったのです。そしてこれと同じように、いやそれ以上に、父なる神様にとって「**ひとり子**」であるイエス様は、あまりにも大切な存在でした。御父は御子を永遠に変わらない愛で愛し続けておられたのです。覚えています？イエス様がバプテスマを受けられた時、天から声がして何と言われていました？マルコ１：１１にこう書いています。「**…「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」**」と。

立ち止まってよく考えてみてください。神様は、文字どおり私たちのすべてをご存じのお方でした。私たちの外側に表れることばやふるまい、行動だけではありません。私たちが今なお何を内側で考えていて、何を内側で思っていて、何を内側で計画しているのか、そのようなこともすべてご覧になっておられるお方でした。隣に座っている人をいくら私たちが欺くことができたとしても、この方の前にはすべてがもう明らかでした。どんな悪や罪にも必ずそれにふさわしい報いを与えられる、そんな正しい神様の前に、罪人である私たちにできたことは何もなかったのです。でもそんな私たちのために、神様は愛を示してくださいました。ただの贈り物ではありません。ご自分にかたくなに逆らう敵のために、ご自分が最も愛する存在を、かけがえのない「**ひとり子**」であるイエス・キリストを与えてくださったのだというわけです。皆さん、神様はいろんなものがある中から適当に選んで、与えます、ではありません。神様が持っておられるすべての中で、最も尊い、最も愛する、最高のイエス・キリスト、その「**ひとり子**」を、ご自身に逆らう敵のために与えてくださったのだというわけです。ただ与えてくださっただけではありません。この愛する「**ひとり子**」を世に遣わし、十字架につけることによって私たちに対する犠牲的な愛を示してくださったのです。Ⅰヨハネ４：８－９にこう書いていました。「**:8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。:9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。**」私たちが普段だれかに何か贈り物をしようとするとき、おそらくその贈り物についている値札を剥すでしょう。剥されているので、それをもらった人たちは、その値段、価値はあまりわからないのです。でも、神様が贈った贈り物には値札がついていました。そこに書かれていたのは、“イエス・キリスト”だったのです。私たちを罪から贖うために神様が支払ってくださったその費用は、ご自分の**「ひとり子」**だったのです。驚くべき神様の愛でした。

そして勘違いしてほしくないのは、来られたイエス様は、強制されたから仕方なくでも、世に遣わされたことに対して不満不平不満を抱いていたのでもありませんでした。御子であるイエス様も父なる神様のみこころに喜んで従って、ご自分のいのちをみずから進んでささげてくださいました。十字架での犠牲的な死を通して、その大きな大きな愛を明らかにしてくださったのです。Ⅰヨハネ３：１６にこう書いています。「**キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。…**」Ⅰペテロ２：２４にもこう書いています。「**そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷の**

ゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」と。このイエス様が払ってくださった犠牲、費用を決して忘れてはいけません。このヨハネの福音書を通しても何度も何度も教えられていたように、イエス様は、ご自身疑いようのない栄光にあふれたまことの神様でした。いっさいの罪も汚れもない完全でいつも正しい、そんな神の御子でした。しかし、そんなお方がこの世に来られてさまざまな苦しみや痛みを味わわれただけではなく、あげく私たちのすべての罪をその身に負って十字架にかかられたのです。御子は私たちの代わりに十字架の上で激しく苦しまれました。何より、そこで罪に燃え上がる神の御怒りをご自身が受けて、そして愛する父の御手によって砕かれたのです。いったい御子はどれほどの大きな痛みを味わわれたのでしょう？ 永遠の初めからただ知っておられた御父の愛ではなく、激しい御怒りをご自分が受けた時、どんなに深い痛みを、悲しみを抱かれたのでしょう？イエス様は言われていました。「**わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか**」（マルコ１５：３４）と。間違いなく私たちの想像を絶するほどの苦痛を味わわれました。でも、本来ならその罰も御怒りも私たち自身が受けるものだったのです。それでもこの方が罪の罰やさばきを代わりに受けてくださったからこそ、燃え上がる御怒りがなだめられたのです。救いにおいて何もできない私たちにできないことをキリストは確かに成し遂げてくださいました。ほかのだれでもないひとり子である主ご自身がみずから進んで十字架にかかり、支払うべき罪の代価を払ってくださったのです。だからこそです。だからこそ、ご自分のいのちをささげてくださった方を信じる者には、罪の赦しが、御怒りからの救いがあると、そう希望をおくことができるのです。父なる神様と、ひとり子であるイエス様。そのどちらもが喜んで払ってくださった犠牲的な愛。皆さん、この愛にまさる愛はどこにもありません。それは、ことばでは言い表すことができないほど偉大なものでした。私たちが何か値したからではありません。神様がそのように愛そうと決められたのです。だから、贈り主と贈り物の中身を私たちが正しく覚えるなら、私たちは只々へりくだって感謝するしかありません。私たちに誇ることのできるものは何一つとしてありません。すばらしいものを与えてくださったのです。これまで見てきた神様の愛は、あふれていました。でもこれですべてではなかったのです。

４．贈り物の目的：信じる者が永遠のいのちを持つため

イエス・キリストというその最高の贈り物には、大きな目的がありました。測り知れない神様の愛には、ある効果がありました。いったいどんな目的だったのか？１６節の続きにこう記されていました。「**それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**」贈り物の目的、それは、「信じる者が永遠のいのちを持つため」でした。ここで一つだけ皆さんに注意してほしいこと、それは、読んですぐに気づいたと思いますが、この箇所のみことばは、「…世を愛された。」そのあと、単に「…それはひとりとして滅びることなく、すべての者が永遠のいのちを持つ」などとは言われていない、ということです。みことばはそのようには言っていませんでした。みことばは、すべての罪人が神様の愛によって自動的に救われて天国に行くのだと、そんな約束をしていたのではありません。そこには、「**それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つ…**」と言われていたのです。イエス・キリストを信じる信仰、ただそれゆえに人が救われるということです。ここに例外はいませんでした。宗教に熱心な人ではありません。周りが称賛するような、尊敬するような、そんな道徳的に正しく歩んでいる人ではありません。神様や聖書の知識をたくさん知っている人でもありません。どんな人種も、どんな国籍も、どんな背景を持っている人だって違いはありません。人はだれも自分の何かによって救いをもたらすことはできませんでした。良い行いも賢明な努力も、永遠のいのちをもたらすことは決してあり得ませんでした。すべてにおいて罪に堕落した私たちには、ただ神様の恵みによって、あわれみのゆえに、信仰を通してのみ救われるのです。 エペソ２：８にこう書いていました。「**あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではな**

く、神からの賜物です。」今私たちは見てきましたが、イエス様を通して示されたその神様の偉大な愛を前にした時、私たちに与えられた唯一の応答、それは、イエス・キリストを信じることでした。

ある人は思っているかもしれません。では、イエスを信じるとはどういうことなのですか？と。どういうことだと思います？信じるとはどういうことなのでしょう？信じるというのは、単に口で「私は信じます。」と一度告白することを言うのでしょうか？イエス様が成されたすべてのことに対して、知識として、それは正しいですねと認めることを言うのでしょか？ いいえ、同じ福音書の中でこのように言われていました。１：１１－１２を見るとこう書いていました。「**:11 この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。**」と。はっきりと書かれていました。イエスを信じることと、イエスを受け入れるということは、同じでした。つまり、私たちはこの方に関する情報に只々同意するのではありません。「信じます」と一度だけ告白するのでもありませんし、この部分は信じるけど、この部分は信じませんといった、自分勝手で受け入れる内容を取捨選択するのでもありません。受け入れる者は、イエス・キリストのすべてを自分のこととしてそのまま受け入れるのです。イエス様が神様であることも、イエス様が罪人である自分に救いをもたらしてくださる救い主であることも、またイエス様が自分自身の主人であって、自分自身の王であることも、イエス様が造り主であることも、そのすべてを心から信じ受け入れるのです。これまではそんな歩みはしてきませんでした。これまでは、神様を王として認めず、造り主としても受け入れず、すべてが自分中心でした。自分が人生の王のようにふるまい続けてきたのです。でも、その人生は終りました。すべてを主に明け渡すのです。自分の罪のために十字架にかかり大きな犠牲を払って愛を示してくださったその方を見上げて、自分をゆだねて、犠牲を払ってこの方に従っていくのです。

皆さん、絶対に勘違いしてはいけません。見てきたように、私たちのどんな犠牲的な行いも救いをもたらすことはありません。でも同時に、犠牲的な愛を知って信仰によって救われた者は、喜んで主のために犠牲を払って、主を愛する者として変えられるということです。新しく造り変えられるということです。それこそ、救いをもたらす真の信仰でした。そして、そのようにしてイエスを心から信じた者は、何と書いていました？「ひとりとして滅びることなく永遠のいのちを持つことができるのだ」というすばらしい約束がなされていたのです。 最初から見てきて、凄いと思いませんか？かつて罪の中に死んでいた者に新しいいのちが与えられるのです。かつて神の御怒りにのみ値した者が、神のおられるその天国へと招き入れられるのです。

でも永遠のいのちがもたらす最高の喜びというのは、私たちが単に天国に行くことができる以上のものでした。確かに天に行けることはすばらしいことです。でもそれ以上にすばらしいことがありました。何か？イエス様ご自身が、永遠のいのちに関してこんなふうに説明しておられました。最後に同じ福音書の中、ヨハネ１７：３をよく見てください。このように言われています。「**その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。**」と。聞きました？「**…永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。**」ここで「**知る**」と言われているのは、単に知識や情報の話をしているのではありません。これは、個人的に知って、個人的な関係を持つことを表していました。ということはどういうことです？ということは、イエス様を心から信じた者は、ほかのだれでもない神様、またイエス・キリストと個人的な関係を今持つことができる、ということです。それが、私たちにとって最高の喜びでした。考えてみてください。本来であれば罪ゆえにさばかれて永遠に神様から引き離され、地獄で苦しみ続けるはずの者が、神様のもとへと引き寄せられ、測り知れないその愛のお方と、この先の話ではありません。今から、信じたその時から永遠に至るその時までともに歩むことができるのだというわけ

です。そして、それこそが、キリストを通して神が示してくださった驚くべき愛でした。値しないものを私たちに与えてくださったのです。

皆さん、いったいどうして私たちはクリスマスをお祝いするのでしょう？いったいどうして私たちはクリスマスの真理を賛美するのでしょう？いったいどうして私たちはクリスマスを日々感謝するのでしょう？それは、救い主イエス・キリストが誕生されたというこの事実のうちに神様の愛を見るからです。測り知れない犠牲を払ってくださったその神様の愛を、私たちはそこに見るからです。だからもし、まだこの中に救い主として来られた方を、これほどすばらしい愛を示してくださったこの方を拒んでいる方がいるなら、自分の救い主として主人として、受け入れるのではなく信じていない方がおられるのであれば、知っておいてください。みことばが言っているとおり、あなたは今まさに永遠の地獄へと向かっているということです。「**…信じる者が、ひとりとして滅びることなく、**」と言われているということは、信じない者は、今滅びに向かっているということです。だからこそ、その状態をきょうそのままにしないでください。そのままの状態をそれで良しとして帰らないでください。どうかきょう、そんなあなたを唯一救うことのできるイエス・キリスト、その方のあわれみを求めてください。この方に対して逆らい続けてきた自分の愚かさを、罪を認めて、悔い改めて、イエス様を愛する者としてきょうから生き始めてください。その喜びをこのクリスマスにどうか知ってください。

この救い主をもう信じて受け入れていて、歩まれているという兄弟姉妹の皆さん。私たちはみことばを見ました。このみことばを通して、私たちはどんな時も賛美することのできる喜びを持っています。このみことばを通して、私たちはどんな時も宣べ伝えるべきメッセージを持っています。このみことばを通して、私たちはどんな時も感謝して礼拝をするべきその愛を知っています。だとすれば、私たちに問われるのは、そのように生きているかどうかです。最高の愛を、贈り物を与えてくださった方を私たちは心から感謝して、この方を心から愛して、この主が召してくださるその時まで、この主と永遠をともにすることを楽しみにしながら生き続けていくことです。それが皆さん、クリスマスが教えてくれる最高の希望でした。最高の喜びでした。「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとしてとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**」